

渡部昇一著『「人間らしさ」の構造』Ⅲ 講談社学術文庫、講談社 1977年5月10日刊を読む

精神的機能快

1. 機能が潜在するとき、それを用いることは、その人の成長に必要で、それを用いないと心をいららさせる。しかし人間には精神的な、目に見えない潜在力があると思う。
2. たとえば愛する力である。この愛は必ずしも男女間のものでなくてもよい。親子の愛、師弟の愛でも、小鳥に対する愛でもよい。人類愛でもよい。愛するものがあることは、生きがいがあることなのだ。
3. 私の場合を例にあげるならば、先生を敬愛するという潜在能力、また学問を愛するという潜在能力を引き出してくださったのは、旧制中学から新制高校にかけての英語の恩師、故佐藤順太先生である。当時私は十五、六歳の青年であり、先生は六十歳くらいでいらっしまったと思う。当時、学校では理科コースと文科コースに分かれ、私は理科コースにいたのであるが、先生の英語の授業を受けて文科に進むことにきめた。とくに楽しかったのは先生のクラスで読んだベーコンの随筆集であった。また授業の途中の雑談であった。
4. 先生は一度隠退されたのであったが、戦後の英語教員不足のために再び教壇に立つことになったのである。人生経験の豊富な上に広範な読書からくる膨大な知識の蓄積をお持ちであった。卒業後は先生のお宅に日参することになったのであるが、先生の書斎には洋書のほかにたくさんのお木版本があった。先生は猟銃と猟犬に関しては全国的な権威であられたし、日本刀についても詳しく、また日本の古典を日常的教養としておられた。私は先生に圧倒され、尊敬し、先生の口から出る言葉は一句ものがすまいと聞いた。
5. ふりかえってみると、これが私の知識への愛と、師に対する敬愛の目ざめであった。私は先生の授業には、他のクラスの授業まで出たし、風邪をひいたときも、先生の授業だけを聞くように登校し、その時間がすむと帰った。学問とか師を愛するというのは人間の魂にある潜在力である。その潜在力が突如として機能し出したのである。
6. 機能があるとき、それを用いることが成長につらなることは、カレルやマズローも指摘するところだ。私は急に頭がよくなってきたような気がしてきた。先生に英語を習いはじめて一年すると、英語は旧制の東大で市河博士が使ったというテキストを買って自分で読むようになったのだから、田舎の高校生としてはめざましい学問開眼であるといっておかろう。と同時に、国語も歴史もなんでもおもしろく、あまり努力しないで理解が進み、数学までよくわかるようになって、優等生総代として高校を卒業した。

7. このことは私にとっては不思議なことであった。というのは佐藤順太先生に教える前は、修練の点が良い生徒だったからである。「修練 良」という意味はいまの人にはわからないであろうが、「修練 秀」が優等生、「修練 優」が普通、「修練 良」は担任に「にらまれている」生徒、「修練 可」というのは停学などの処分を受けた生徒なのである。私は順太先生におそわるまで、この「修練 良」のため、毎日毎日くそおもしろくもない思いで学校に通っていたのである。しかも担任（それは別の英語の先生であった）ににらまれた理由は、授業中に小説を読んでいたのを見つけたためである。一回目はしからただけ、二回目は昼休みに読んでいたのに、その担任は「退学しろ」といってきかなかつたのである。ようやくあやまって許してもらったのだが、その後すっきりにならなれ、何をやってもおもしろくなくなってしまった。
8. その担任は英語科出身であるのに、なぜあのように病的に小説を憎んだのかわからない。いまからみれば、その担任教師は英文学などやる柄でなく、なんとなく英語をやって、戦時中のこととてただ小説好きの生徒をいじめることに熱中していたのであろう。この担任には知識愛とか学問への志向などは枯れ果てていたらしいのであるから、教え子の知識愛をひき出すわけにもいかなかったのであろう。当時のこととて私には自分の教師を批判するような気持はなかったのであるが、なんとなくこわいだけの存在になってしまっていた。ついでながらいっておけば、この先生に取りあげられた小説を、後に古本屋で買い戻したことがあった。まったくひどい話である。
9. こういう状況においては、知識への愛、向上への意欲、先生への愛という潜在力はすべて機能しない。私は中学の三年間、講談本と三文小説、しれにへボ将棋をして暮らしていたようなものである。勉強は試験に落ちないだけにして、学校のことはサボれるだけサボる。親を心配させたくないから、外見だけはちゃんと学校に行く。
10. 佐藤順太先生が現われたのはこのときだったのだ。先生は本物の学者で、本物の教養人であった。自分の先生を尊敬できるということは、若い者にとって一つの潜在力であったのだということ、いまさらながら実感する。私はその後、師を敬愛するという能力ができ、学問を愛し知識を愛することができるようになったからだ。この能力は大学生生活をきわめて稔り豊かにしてくれることになった自分の先生を敬愛することができ、知識を愛することができれば、勉強は生きがいになるからである。私はこのことをいまでも佐藤先生に感謝しているが、他の分野においても、生きがいを感じて生活している人は、かならず、なんらかの形で愛の機能が活動し出した時点があるはずだと思う。

自分に喜びを与えるもの

11. 「小公子」に出てくる気むずかしくて意地悪な貴族の爺さんは、孫を愛するようになったときから、突然人格的な成長をはじめ。愛する人ができたときから、この世に生きがいを見出すのが人の常であり、そのことによっていちじるしい人間的成長が見られるのが常である。敬愛する友人ができることも、その人の精神の成長をうながす。旧制高校の卒業生たちが、そこの寮にいた時代を語るとき、たいてい涙をながすほどのなつかしさにおそわれるのは、そこで友情という人間の魂の潜在力を始動させたからである。
12. このほかにも、人間の精神的機能快としては、美しさを認識する力、おかしなことを笑う力、

あそびを楽しむ力などいろいろある。美しいものに感心し、おかしいことを笑い、楽しく遊ぶということは、精神の本来の能力を機能させていることなのであって、それは人間の心を正常に保ち、また成長させるもととなるものなのである。

13. ここで思い出すのは夏目漱石のことである。彼は相当強度のパラノイアに苦しんでいたため、奥さんには気違いとしか思われたい時期がよくあったらしい。しかし彼はほんとうの気違いにはならなかった。よく寄席に行き、また絵を書き、ユーモア小説を書いたのである。発狂寸前の状況にありながら、漱石の心はおかしいことを笑い、ユーモアを見つけ、美を感ずるという機能をとめなかった。そして彼をついに近代日本の生んだ最大の頭脳の一つにまで成長させたのである。

14. 発達した管理社会に働くサラリーマン、受験勉強をしている高校生、人生目標を失ってノイローゼになりかかっている大学生などは、まず自分の心の中にある喜びを知覚する能力を機能させることがたいせつである。それが抑圧の中からほんとうの自己を見出す手がかりになるからだ。ふざけることですら、人間の精神の重要な能力であることは、ホイジンガーの「ホモ・ルーデンス」によってみごとに示されている。子猫だってじゃれるという能力を使うことによって成長するのだ。子供や青年にとって、遊んだりふざけたりすることは勉強同様、成長に重要なことはいうまでもない。生きがいを見失ったように感じている大人にとっても、まず「何が自分に鋭い喜びを与えるか」を内省することからはじめるべきであろう。そこに忘れられた鍵がある。

<コメント>

メスの蜜蜂に対する「ロイヤルゼリー」、どんぐりに対する「豊穡な地面」は、人間に対する「先生」かもしれない。よい先生の条件とは何か。渡部先生の本著から学びたい。

2018年10月13日（土）